

Title	ハイアシンズ・ロビンソンとカサマシマ公爵夫人 : ジェイムズの『カサマシマ公爵夫人』について
Author(s)	舟阪, 洋子
Citation	大阪外国語大学学報. 64 p.371-p.382
Issue Date	1984-03-20
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80987
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ハイアシンス・ロビンソンとカサマシマ公爵夫人

——ジェイムズの『カサマシマ公爵夫人』について——

舟 阪 洋 子

Hyacinth Robinson and the Princess Casamassima: The Drama in *The Princess Casamassima*

Yoko FUNASAKA

Henry James's *The Princess Casamassima* (1885), often referred to as a “freak,” is neither naturalistic nor Dickensian but unmistakably Jamesian in the sense that the drama in the novel is none other than the drama of consciousness of its sensitive hero, Hyacinth Robinson. As a son of the British aristocratic father and the French plebeian mother, he is split between two sympathies, one toward all the accumulations of civilization and the other toward a revolutionary cause. The novel presents to the reader Hyacinth's consciousness, his perception of beauty, his bewilderment and errors, and the final awakening. Paul Muniment and the Princess Casamassima play the most important role in his drama, as one represents, to Hyacinth's consciousness, the revolutionary cause, and the other, wealth, beauty and civilization.

What gives the novel its complexity is that the Princess Casamassima not only appears as an influencing force in Hyacinth's drama but also as the heroine of her own drama. We have thus two dramas in the novel; Hyacinth's drama of consciousness and the drama of the Princess who throws away all her wealth to work for the poor, driven by an unquenchable desire to do good and to be “sincere,” but who, though unconsciously, causes disaster to Hyacinth. I tried to show here how these two dramas intermingle with each other to produce irony and drama in this novel.

1

ヘンリー・ジェイムズの作品群の中で、しばしば変種扱いされてきた『カサマシマ公爵夫人』(*The Princess Cosamassima*, 1885)¹⁾ は、ジェイムズがリアリズム又は自然主義に最も近づいている作品であるとか、ジェイムズ風というよりはディケンズ風の小説であるとか（この場合それはかなり曖昧に、全能の作者が登場して全てを教えてくれる書き方を意味しているのだか）とい

う説明を受けてきた。それにはいくつかの理由が考えられるだろう。実際初めてこの小説を読みだす時、私達は間違っでディッケンズの世界に迷い込んでしまったような戸惑いを感じるはずだ。舞台は、ごみごみしたロンドンの下町、そしてそこに登場する人物達は、人は好いが当世風とはいいかねるお針子のピニー、お上の御威光をかさに着たような看守のパワーバンク夫人、いかにも抜け目のない下町娘ミリセント・ヘニング、そして監獄の薄暗い病室でハイアシンズ少年をかき抱くフランス人の女、というジェイムズの他の作品ではめったにお目にかかれないような人達である。その人達は、ジェイムズによりも、あの偉大なメロドラマティスト、ディッケンズの方によりふさわしいようだ。しかしその印象は最初の数章だけのことで、やがて私達は作品が読み慣れたジェイムズ風の世界に戻っていることに気づくのである。

又人々は、この作品が世紀末のロンドンの社会不安、そして革命をめざすアナキストの集団という政治的背景を、時に数字を交えたりして（その時のロンドンでは四万もの人が職にあぶれ、五十万の人が飢えようとしていた、と作者は説明している²⁹⁾）書きこんでいる点を重視して、これをリアリズム小説と呼んだこともあった。この場合、その社会的背景が歴史的事実に即しているかどうかが大きな問題となるだろう。実際『カサマシマ公爵夫人』をリアリズム小説と受け取った、主に初期のジェイムズ研究家達は、この点で作品を評価しようとし、そして多くの場合、この作品を不満としたのであった。しかしジェイムズ自身は「社会主義を知っているふりなど、まるでしていない³⁰⁾」のである。この作品は社会の不公平を告発する政治小説では決してない。といって、まるで政治的意図はなかった、と断言してしまうのもジェイムズの意図に反するようである。彼自身の言葉を借りれば、次のようになる。

What it all came back to was, no doubt, something like *this* wisdom—that if you haven't, for fiction, the root of the matter in you, haven't the sense of life and the penetrating imagination, you are a fool in the very presence of the revealed and assured; but that if you *are* so armed you are not really helpless, not without your resource, even before mysteries abysmal.⁴⁰⁾

ジェイムズは「愚か者」ではなかった。彼は「深淵のような謎」を前にして、鋭い想像力で「問題の根本」をつかんでいたのである。彼のアナキストの活動の描写は正確ではなかったかもしれない³¹⁾。しかしヨーロッパがその歴史と伝統と美の背後に腐敗を隠していたことは、ジェイムズのアメリカ人主人公達がヨーロッパで発見したことであった。更にジェイムズは、今一つの文明が崩壊の危機にさらされているという感覚「崩壊の想像力」(“imagination of disaster”)を持っていた。『カサマシマ公爵夫人』で描かれる社会の不平等、下層階級の貧しさ、不満は、たとえジェイムズが直接知らないものであったにせよ、それらは彼が想像力で捉えた「問題の根本」であった。ジェイムズは巨大な表面の下で渦まくものを直接描くことはできなかった、それは「私の主題はそれよりももっと厄介な面があったからだ³²⁾」と言う。それは勿論主人公ハイアシンズ・

ロビンソン (Hyacinth Robinson) の視点の物語であった。ジェイムズは、この決してリアリティックではないが、真実に裏打ちされた背景を一方に据えて、これを見ているハイアシンスの意識のドラマを展開しているのである。

しかしその視点の統一はジェイムズの後期小説のそのように厳密に守られていないことは認めなければならない。ジェイムズの小説が後期になるに従って視点の統一が守られるようになったとすれば、『カサマシマ公爵夫人』の全作品の中で占める位置をその統一の程度から決めようとする試みも不可能でないかもしれない。「『カサマシマ公爵夫人』は基本的には二つの小説である」と書いたのは Walter Dubler という人であった。彼は作品の前半二巻がジェイムズの初期小説特有の外面的 (external) な書き方の終着点であり、三巻からの後半が彼の後期小説の内面的 (internal) な書き方の出発点であり、二つの傾向が相入れないものである以上、『カサマシマ公爵夫人』は真中で分裂してしまう、と論じるのである⁷⁾。しかし私はジェイムズの初期の書き方が後期の「内面的」な書き方に対して「外面的」であるとは思わない。この作品でも純粋に「外面的」といえるのは最初の三章に限られており、その極端に「外面的」なところがかえって作者の特別な意図を思わせる。

その最初の三章とは、主たる物語の十年程前、ハイアシンスが十才の時、看守のパワーバンク夫人 (Mrs. Bowerbank) がハイアシンスを引き取って育てているピニー (Pinnie) の許を訪れて、フレデリック卿 (ハイアシンスの父親) を刺し殺して獄中にある彼の母親が、死に瀕して一目息子に会いたがっている、と告げるところから始まり、それと知らされぬままに少年が母親と対面するまでを扱った部分である。

この部分をよく読んでみると、読者は作者がメロドラマにも悲劇にもなりうるこの場面を、徹底的に距離を置いた冷淡な語り方をすることによって、グロテスクな喜劇に仕立ててしまっていることに気づくだろう。昔の友人の最後の願いをかなえてやりたいという思いと、ハイアシンスが出生の秘密を知るのではないかという不安の間でおどおどと揺れ動くピニーは、ここでは愚かで滑稽な人物でしかなく、誰にも分らぬフランス語をしゃべり、ハイアシンスをかき抱くやせ衰えた女は、どこか現実離れしてグロテスクである。そのグロテスクさが、このエピソードを、ハイアシンスにとっても読者にとっても、遠い日の悪夢のような経験として遠ざけてしまう。この効果を更に完璧にする為に、作者は殊更にハイアシンスの内面に立入ることを避けている。少年を母親に会わせるべきかどうかと悩むのはピニーであり、結局連れてゆかれた監獄の薄暗い病室で見知らぬ女に抱きしめられる時、「どんな思いがその瞬間彼の驚きに満ちた心の中に生まれたのか、彼の保護者は後になって知るべく運命づけられていた (I, 56)」と、作者はまことにあっさりとかわしてしまう。

つまり作者が意識的に読者の同情を拒み、人物の内面に立ち入ることを避けたことによって、このプロローグは一枚のタブローようになって、これから描かれるハイアシンスの葛藤を前もって象徴的に映し出す役目を果たしているのである。従って視点はこの後次第にハイアシンスに

移ってゆき、彼の意識のドラマが始まることになる。

ハイアシンスのドラマは、イギリス人貴族の父の血からくる上流社会の文明と美への憧れと、フランス人娼婦の母の血からくる下級庶民への共感とに引きさかれる迷いのドラマであり、それと密接に結びつきながら進行するポール・ミュニメント (Paul Muniment) とカサマシマ公爵夫人 (the Princess Casamassima) に対する友情と誤解と失意のドラマである。

しかし同時に読者は、この作品の中に、もう一つカサマシマ公爵夫人の物語も読みとることができるはずだ。作品全体にわたって、ハイアシンスの視点の統一を乱す何章かが組みこまれ、そこで私達はハイアシンスは知らない公爵夫人についての事情や彼女の行動を知らされる。それは勿論ハイアシンスの意識と現実との落差によるアイロニーの効果をもたらす役割を果たすが、同時に作者はここで、ハイアシンスと同じように二つの世界から疎外されている人物、最高の富と文化と美を代表しながら全てを捨てて貧者に施こし、新しい世界の到来をめざして働こうとしながら、誰からも信用されず、結果的にはハイアシンスの破滅の一つの原因を作り出しただけで、おそらく元の生活に戻らざるをえないだろうカサマシマ公爵夫人のドラマを描いているのである。

ジェイムズの処女作『ロデリック・ハドソン』(*Roderick Hudson*, 1875) でロデリックの運命を狂わせたクリスティーナ・ライトが、ジェイムズをも魅了して結婚後の人生を演じる為に再びここに登場した時、ハイアシンスの意識のドラマという印象が少々希薄になってしまったことは確かである。しかし二つの世界の真中で出会った二人の物語が、互いに独立しながら尚密接にからみあって進行してゆくことによって、作品の皮肉、悲劇性が増していることを見落してはならない、と私は考える。

2

ジェイムズは、この作品のために次のような青年を想像したという。

some individual sensitive nature or fine mind, some small obscure intelligent creature whose education should have been almost wholly derived from them, capable of profiting by all the civilization, all the accumulations to which they testify, yet condemned to see these things only from outside—in mere quickened consideration, mere wistfulness and envy and despair.⁸⁾

ハイアシンス・ロビンソンはまさにそのような青年である。一介の貧しい製本職人である故に、文明の蓄積を「憧れと羨みと絶望をもって」眺めることしかないハイアシンスは、社会の不公平を身をもって意識し、何百万もの庶民の闘いと苦しみに心を引かれ、「庶民と共に庶民の為に何かをすること (I, 163)」に情熱を感じるようになる。しかし一方で彼はどこか紳士の雰囲気を持ち、庶民はつい彼を後込みさせ、彼の嫌悪感をかきたててしまう (I, 163)。彼は製本術という最も芸術的な仕事によって、その趣味に磨きをかけ、俗っぽいものを嫌い、価値あるもの

を見抜く眼をもっているのである。そしてそれらの価値あるもの、「人生のうちで彼が最も享受したいと思っている全てから隔てられているという感覚」が彼に「麻痺させられそうな憂うつ、限りなく悲しい思い」を引きおこす。彼自身も考えるように、「民主主義の到来の為に地下で働きながら、同時にひどい社会的不公平のもとに成り立っている光景をいかにプラトニックにではあれ楽しみ続ける（Ⅰ，171）」というわけにはいかない。「正反対の方向に彼を引っ張る二つの共感に引き裂かれ」そして「二つの巨大な力が死を賭けて取っ組み合う日が近い」ことを予想し、ハイアシンスはいつか選ばねばならないことを考えておびえている（Ⅰ，171）。

この「二つの共感」の分裂を、作品はフラン人娼婦を母とし、イギリス人貴族を父としたという相矛盾する血の宿命によって象徴させているのであるが、もしその分裂が「血の宿命」であったのなら、ハイアシンスがどうあがこうと、一方を選ぶということは不可能であったはずだ。その意味で Dubler がこのハイアシンスの出生の事情を「環境決定論のドキュメント⁹⁾」として受けとったのは、妥当なことでもあったのだ。ハイアシンスは選択不可能な二者択一を前にして、真剣に結論を出そうとしている。「彼の結論などどちらの陣営にとっても重大なことではなかったろう。しかし彼自身にとっては重大だったのだ（Ⅱ，264）」と作者は述べているが、そのように「真理」を求めるハイアシンスの姿にこそ、作者と読者は関心を寄せるのであり、彼の「意識のドラマ」が興味あるものとなってくるのである。

彼のドラマはまず彼が「誤った空想的な物の見方」から、社会の転覆をねらう地下組織の大家 Hoffendahl（Hoffendahl）に対して重大な忠誠の誓いをしてしまうところから始まる。

ハイアシンスが殺人を犯して獄死した女の息子として、反社会的地下運動に参加する資格が人一倍あることは自地共に認めるところであった。しかし彼は貴族の娘オーロラ嬢（Lady Aurora）程にも最下層の庶民のことは知らなかった。彼を貴族の息子と信じるピニーによって紳士として育てられたハイアシンスは貧しくとも洗練された服装をし、h の発音に悩まされることもなく、明日のパンを思いわずらう必要もなかった。ハイアシンスが「庶民と共に庶民の為に何かをしよう（Ⅰ，163）」と考えるのは、つい後込みさせられる庶民を見ている時よりも、美しいミリセント・ヘニング（Millicent Henning）と一緒にいる時であったことを作者は指摘し、それが彼の「誤った空想的な物の見方（Ⅰ，163）」から来るのだと付け加えている。ミリセントはハイアシンズより悲惨な境隅から一人たくましく抜け出し、より華やかな生活をのみ夢見ている俗っぽい、しかし生命力あふれる娘だからである。

このようなハイアシンズが地下運動に参加し、忠誠を誓うまでの情熱を見せるようになる大きな原因は、ポール・ミュニメントの影響にある。ハイアシンズはこの化学工場に勤める労働者に初対面で心を引かれ、彼を特別な人物として考えて絶対的信頼と敬意を寄せる。姉のロージー（Rosy）やオーロラ嬢から崇拜され、集会で口を開けば皆が謹聴し、黙っていれば皆の考え及ばない未来のことを見通していると思われるこの人物は、皆の考えるような「本物」（“the real thing”）であったのかどうか、作者は教えようとはしていない。唯彼の見せる革命家としての非

人間的と言える程の冷酷さ——彼はカサマシマ公爵夫人に、運動資金として彼女の財産にのみ関心を持ったと言ってはばからないし（II, 413）、ハイアシンスに行動の指令が届いた時も、動ずる気配も見せない（もう一人の革命家プーパンの見せる狼狽と苦悩と対称をなす）——は、Edward Wagenknecht が「あの完璧な立身出世主義の革命家¹⁰⁾」と呼ぶのも当然と思わせる。ハイアシンスはポールに、いつも夢見ていた「偉大なる友情（I, 228）」の実現を期待するのであるが、それも又「誤まった空想的な物の見方」であったと言わざるをえない。

ハイアシンスはポールに信頼する友人として扱ってもらえる機会をいつも待っている。問題の「日月亭」での集会の夜、ポールが突然「ホフエンダールがこっちに来ている」と言って皆を興奮させる時、ハイアシンスはポールが前もって話してくれなかったことを「腹立ちはしなかったが、辛棒強い胸の痛みを意識して（I, 357）」寂しく感じ、「もし他言してはならない、忠誠を誓わねばならないことがあるのなら、自分にこそ、そのような難かしい仕事ができるということを示すチャンスを与えてほしい（I, 357）」と切に願うのである。従って彼が周囲の熱気にもあおられて突然立ち上り、「僕は何か役に立つことなら、どんなことでもする（I, 360）」と叫ぶ時、それは真の革命的情熱からというよりは、彼のこのようなポールへの思いから来ているのだと考えた方がよい。「偉大なる友情」というロマンスをポールにかぶせ、その実現を願ってホフエンダールに対する誓いにまで突き進んでゆくハイアシンスが、やがて現実にも自己にも裏切られるだろうということは当然予想できる。ホフエンダールの許に向う馬車の中で、ミュニメントが力強い腕で彼を抱きしめているので、それがひょっとして心弱くも心変わりするのを防いでいるのかもしれないとハイアシンスは一瞬考えるのであるが、それはポールの冷酷さの予感でもあれば、彼自身の変節の予感でもあったのだ。

この第二巻十一章までと第三巻一章からでは読者に与える印象が大きく異なっている。前述のDubler はこれをもって前後がまるで違う二つの小説になっていると受け取ったのであったが、実はそれは作者の書き方が外面的から内面的に変ったからではなく、ハイアシンスの物の見方が今までの表面的見方から、より内面を見通す目になっていったことを意味しているのである。その変化はハイアシンスが今初めて、それまでいかに憧れをこめて眺めていようと結局「享受するどころか知る機会すらも与えられていなかった（I, 169）」上流社会に属する文明に直接触れる機会を与えられたことから起こったものである。庶民のことが知りたいというカサマシマ公爵夫人に招かれたメドレー・ホールでの生活は、ハイアシンスにとって新しい世界の顕現であった。彼はすべてを意識的に忘れて、新しい世界に没頭する。

The cup of an exquisite experience...was at his lips; it was purple with the wine of romance, of reality, of civilization, and he couldn't push it aside without drinking.
(II, 41)

その経験の盃を飯み干し、今や見事に磨き抜かれた感受性を得たハイアシンスがもう一步の成長

をとげるのは、ジェイムズの他の多くのアメリカ人主人公達と同様、ヨーロッパの経験によってであった。ピニーの遺言に従い、彼女の遺産をはたいてパリにやって来たハイアシンスは「更に幅広い知識、更に高い感情へ（Ⅱ，121）」と飛び立つようである。今彼の頭にあるのは「自分の回りにある社会をいかにして破壊するかという考えではなく、むしろ社会が産み出した素晴らしく貴重なもの、社会の打ち建てた美と力の建造物のこと（Ⅱ，125）」であった。ヨーロッパでの経験と思考からハイアシンスが到達した考えは、彼がヴェニスからカサマシマ公爵夫人に宛てた手紙の中で明らかにされている。彼はあらゆる場所で「欠乏と労働と苦悩が人類の大部分を占める人々の永遠の運命である」ことを認めながら、尚「より幸せな少数者の輝かしい蓄積」に感動せずにはいられないことを告白して、続けている。

The monuments and treasures of art, the great palaces and properties, the conquests of learning and taste, the general fabric of civilisation as we know it, based if you will upon all the despotisms, the cruelties, the exclusions, the monopolies and the rapacities of the past, but thanks to which, all the same, the world is less of a 'bloody sell' and life more of a lark—our friend Hoffendahl seems to me to hold them too cheap and to wish to substitute for them something in which I can't somehow believe as I do in things with which the yearnings and the tears of generations have been mixed. (II, 145-46)

彼は革命を目ざす者としては「墮落」(demoralised) した。しかし彼は豊かな経験を得て、美について開眼したばかりでなく、大多数の庶民の苦しみも、よりよく見えるようになるのである。即ち経験を得たと言うことは、彼の分裂の苦しみをより鮮明にすることであった。「彼の性質を流れる二つの流れの間で彼は心安まる時がなく（Ⅱ，264）」、ヨーロッパでの経験が遠ざかり、再び「ロンドンのぞっとする大衆（Ⅱ，267）」を目にすると「もう一度大洪水がおこる以外にどんな治療が、絶滅する以外にどんな妙薬があろう（Ⅱ，267）」とまで考える。

If it was the fault of the rich, as Paul Muniment held, the selfish congested rich who allowed such abominations to flourish, that made no difference and only shifted the shame; since the terrestrial globe, a visible failure, produced the cause as well as the effect. (II, 268)

革命だけでは救えない人間世界の悪をまで見通し、地下運動への共感を完全に失ったハイアシンスが、尚誓いを守ろうとする矛盾の解決を与えるのは、再びポールに対する友情である。「僕は君の言うことに従ってどこにでも行くよ。…君の信念をそのまま信じているとは言えないが、でも君は信じているんだ。結局同じことになるのじゃないかい（Ⅱ，219）」と彼は熱心に言う。解決できない問題をポールへの信頼で解決してしまうのである。

...Paul was a grand person, that friendship was a purer feeling than love and that there was an immense deal of affection between them. (II, 219)

とハイアシンスは満足して考える。しかし作者は次の一文を付け加えるのを忘れない。

He didn't even observe at that moment that it was preponderantly on his own side. (II, 219)

やがてハイアシンスの夢が破れ、彼の唯一の解決策が消えてしまう日がやってくる。それはポール・ミュニメントとカサマシマ公爵夫人との秘密めいた行動を彼が目撃する瞬間であるが、それは又カサマシマ公爵夫人が彼の人生に大きく影響を与える瞬間でもあった。

3

カサマシマ公爵夫人は『ロデリック・ハドソン』に登場したクリスティーナ・ライト (Christina Light) の数年後の姿である。前作で心ならずも公爵と結婚させられた後、彼女は語り手ローランド・マレットに「貴方は最上の時の私を御覧になったのです」と言い、後は楽しみを見つけて暮すつもりだと投げやりに語っていた¹¹⁾。今彼女は夫と別居し、退屈で困襲的な上流社会に反撥して下層階級に関心を向け、地下組織とも繁がりをもっているらしい。ここでは前作品への言及は全くなく、前作で未完成であった人物像がここで完成されたともいいがたいことを不満としてもいいだろう¹²⁾。彼女はハイアシンスの物語とからみ合いながら、どのような役割を果たしているのだろうか。

クリスティーナがハイアシンスを初めて美の世界に触れさせ、彼の感受性が成長する機会を与えた人物だったことは確かである。しかし、だからといって、もし彼女に会わなければ、彼は永遠に美の世界に触れることもできなかったろう、とも言えない。彼の生れもっての感受性が本当の意味で磨かれ、彼の考えを転換させたのは、先に述べたようにヨーロッパの経験であったからだ。彼女は又ロデリック・ハドソンを破滅させた、と言える程の意味でも、ハイアシンスを破滅させたわけでもなかった。破滅に迫いやる一つの力にはなっていたかもしれないが、とも角ハイアシンスにとって彼女が何だったかを明らかにする仕事は案外難しい仕事である。

カサマシマ公爵夫人は下層階級の人々を知るために、偶然出会う機会を与えられたハイアシンスを拾い上げた。彼女が彼を見る目には「珍しい動物 (I, 292)」を見るような表情があり、又「彼女の性格の片隅のどこかに非常な傲慢さがひそんでいる (II, 152)」ことを彼は感じている。それでも彼が彼女との「静かな友情 (II, 179)」を楽しむのは、彼女がいかに財産を投げ出し、質素な服を着、場末の佻しい家に住みつこうと、彼女は彼にとって常に富、美、文明の代表であり、中世ロマンス風の「生涯の貴婦人 (“the lady of his life,” II, 155)」であったからだ。クリスティーナの行動について、グランドーニ夫人は「心配なさらなくて。長続きしやしませんから (I, 278)」とカサマシマ公爵を慰さめ、ポールも「全部捨ててしまった人にしては、随分沢山

残っていますね (Ⅱ, 231)」と皮肉り、「貴方は一文もなくなった時には、御主人の許で一緒に暮さざるをえないでしょうよ (Ⅱ, 412)」と冷酷に言い放つ。オーロラ嬢ですら「あの方本当に貧しい人に関心をお持ちですの (Ⅱ, 192)」という疑いを口にする。ハイアシンズも同じように彼女が「古い陶器や織物は捨てられても、素晴らしくピッタリあったシミ一つない手袋は捨てられなかった (Ⅱ, 169)」ことに目を留め、結局この時の彼女の行動は長続きするはずもない「離れ業」(*tour de force*, Ⅱ, 177) にすぎないを考える。しかし彼の場合そのように考えるのは皮肉からというよりは、それこそがクリスティーナにふさわしいと考えているからであった。質素な彼女に魅力を感じるの、彼女が高い地位に登りうる人物だからである。

There was an extraordinary charm in this mixture of liberty and humility—in seeing a creature capable socially of immeasurable flights sit dovelike and with folded wings. (Ⅱ, 270)

しかしハイアシンズが「お互いがお互いの幸せに欠くべからざる存在だ (Ⅱ, 268)」という自負をもち、まるで彼女と結婚でもしているような (Ⅱ, 269) 自然な付き合いを楽しんでいる時にも、クリスティーナの心が次第にハイアシンズを離れてゆくのを、読者は見ることができる。彼女は下層階級の案内役としてハイアシンズよりはオーロラ嬢を選び、その言動は過激さを増し、ついには美そのものの価値も否定する。ハイアシンズが技を尽し、心をこめて装幀した本にも「人は神とマモンの両方に仕えることはできないのです (Ⅱ, 259)」と言って冷淡さを見せる。そして彼女はハイアシンズに対する以上の関心をポール・ミュニメントに向けるのである。彼女がこの「粗野で男っぽい力 (Ⅰ, 125)」を持ち、「貴女を訪問して僕に何かいいことがありますか (Ⅱ, 171)」と平然と言っているのけるポールに向けた関心が、女としての関心だったとは言い切れないだろう。彼女は彼の中に革命家としてハイアシンズにはないある偉大さ（「とも角貴方は成功する方です。ハイアシンズは成功しないでしょうが貴方ならします (Ⅱ, 230)」）を認めているのであり、彼を指導者とあおぎ、教えを乞い、役に立ちたいという欲求をかなえてくれる人物として彼と行動を共にするのだ。彼女が口にする思想は、ハイアシンズの視点が支配するこの世界では特別に過激に聞こえるが、それはジェイムズ自身が友人に宛てた手紙の中に見受けられる考えでもあった。他の登場人物達がいかに皮肉と疑いをこめて彼女を見ようと、作者自身の彼女を見る目には皮肉は含まれていないという点を強調しておきたい¹³⁾。

カサマシマ公爵が過激に走る妻を悪魔と呼ぶ時、グランドーニ夫人は「悪魔ではありません。彼女は善をなしたいと思っているのですから (Ⅱ, 310)」と言ってそれを否定する。クリスティーナの行動を皮肉な目で見えるグランドーニ夫人が、彼女の本質については真実を語ってくれるのである。Wagenknecht は『ロデリック・ハドソン』から続くクリスティーナ・ライトについて様々な興味ある示唆を与えてくれるが、彼は彼女がポールと違って「人間であり、個人であり、女であり、だから『運動』に完全に埋没したり同化したりできないのだ」と説明している¹⁴⁾。即

ち彼の結論はこうである。

The basic truth about Christina Light, then, is that at heart she is not a cynical adventuress but a romantic idealist, and for this very reason she is far more dangerous, both to herself and to others, than any mere adventuress could be.¹⁵⁷

彼女は『ロデリック・ハドソン』の時から、誠実な生き方を理想とし、それを求める時に宿命的に周りの者——ここではハイアシンス——に苦しみを与え、誤解を受けることになる。

ハイアシンスはカサマシマ公爵夫人とポール・ミュニメントの姿を見たことで、二人についてのロマンティックな夢を破られた。ポールから友情というロマンスをはぎとった時、彼が時々見ながら気づこうとしなかったポールの真実の姿——革命家としての冷酷な理性、合理性、非情さ——が残るのである。この点について J. M. Luecke は、ハイアシンスは始めポールとカサマシマ公爵夫人を現実以上の人物として誤解していたが、このでき事で、彼は今度は二人を現実以下のものとして誤解して死んでゆくのだと論じている¹⁶⁾。しかしハイアシンスは現実以下というより現実そのもののポールを見ているのだ。裏切り行為だと憤慨するミリセント・ヘニングに「あの人は一番立派な人だ。二人は同じ考えをもち、同じ仕事をしているんだ。…自分の求めることも自分の考えもはっきり分っている人だ（Ⅱ，345）」と言ってポールの弁護をするのも、単なる自尊心と強がりだけではなかったはずだ。

しかしカサマシマ公爵夫人の真実を見ることはハイアシンスにもできなかった。彼は彼女の心が完全に自分から離れてしまっているのに気づき、グランドーニ夫人が彼女を「気まぐれ」(“capricciosa”，Ⅱ，10)と呼び、「予感による同情（Ⅱ，418）」で彼のことを「可哀そうに」と言っていたことを思い出し、ポールもいつかその地位を誰かに奪われるだろうか、と思ってみる。最初と変らぬ讃美を捧げながら尚彼女が自分のものでなくなったという感覚は、嫉妬と共に破滅にも導びく絶望をもたらすのである。しかしそのすぐ前にハイアシンスの知らないある場面を読んでいた読者は、彼の誤解に気づき、大きな皮肉を感じることになる。そこではポールが「貴女のお金——というか貴女の御主人のお金——を私共に下さることで、貴女の貢献しうる最も貴重なものを下さったのだと僕は思っています（Ⅱ，412）」と言って、暗に収入の道が途絶えたカサマシマ公爵夫人は組織にとって不必要な人物であることをほのめかしているからである。

ハイアシンスにとってカサマシマ公爵夫人は「生涯の貴婦人」であり、それ以外の彼女の姿を見ようとはしていなかった。貧しい人の為に働くことに於て「彼女が他人を救うことより自分自身を救おうとしている（Ⅱ，261）」ことに気づいたこともあったのに、彼女はオーロラ嬢について「あの方は今まで会った誰よりも完全に自己から抜け出しておられます。人の為に何かをするという情熱の中に溶け込んでおられるのです」と言い、彼女が羨やましいと語っていた（Ⅱ，224）。そこに地下運動にのめりこんでゆくクリスティーナの真の欲求（「私達賢明であれば誰でもその問題を解決したいと思いますわね」と彼女の言う通り、多くの人々の真の欲求でもある）が

あるはずなのだ。

ハイアシンスのもとに暗殺の指令が届けられることで物語は終局を迎える。友情というごまかしの解決を失ってしまい、再び逃れようもない「二つの共感」による分裂を前にしたハイアシンスは、気持が変わったのだから指令に従う必要はない、自分に忠実に行動してほしいのだというブーパンに対して「だからといって僕の神聖な誓いが変わるとでもいうのですか。人が心を変えることのできないことがあるものなのです。僕は信じるとは誓わなかった。従うと誓ったのです(Ⅱ, 371)」と言ってその指令を受け取る。しかしそれを実行する程度の革命的情熱は残していると自負するハイアシンスの行動を最終的に引き止めるのは、上流社会への憧れというよりは、「彼個人の汚点という考え」即ちそのような行動は「母親のもう忘れられた、償いも終わった汚れを再び世間の目にさらすことになるという考え」(Ⅱ, 419)であったのだ。皮肉にもそれは、美への感受性の確認の中に消えかけていた自己の中の庶民の血を再確認し、これが選択不可能な二者択一であることを、もう一度強調したことになるのだ。

Brian Lee は『カサマシマ公爵夫人』の特徴を次のように説明している。

What distinguishes *The Princess Casamassima* is Hyacinth's and James's inability to make a choice between political or moral action on the one hand, and art on the other. James, of course, in actual fact, had made the choice years before when he had first decided to become a novelist and his inability only consists in his failure to provide any entirely satisfactory justification for the choice.¹⁷⁾

確かにハイアシンスもジェイムズも選べなかった。唯それは、どちらかを選ぶという性質の問題ではなかったからだ。ハイアシンスは自らピストルを向けることで選ぶことを放棄し、ジェイムズは一見社会的関心とは無縁に見える世界を描きながら、常にその優雅な表面の下に存在し、渦巻いている暗黒の無秩序の世界——西欧文明の崩壊の想像力——を読者に突きつけたのである。

ハイアシンスは自殺した。彼に指令が来たことを知ったカサマシマ公爵夫人が、彼の使命を身替りになって果たす目的で彼の部屋を訪れ、彼の横たわるベッドにかがみこんで低い奇妙な泣き声を洩らす場面で作品は終わっている。「私もうお金もないのに」と言いつつ駆者に報酬をはずみ、ハイアシンスを救って同時に革命の為に役立つ仕事を自分が代ってする、という夢にせかされてやってきた公爵夫人の夢破れた姿は、ハイアシンスより悲劇的でヒロイックである、と Luecke と共に認めたいと思う。

(1983年9月)

NOTES

1) Henry James, *The Princess Casamassima* (1885). 使用テキストは New York Edition in 2 vols.

2) *Ibid.*, Vol. 1, 344 and 354. 以後、本テキストよりの引用については、本文中()に巻数、頁数を含める。

- 3) Joseph Warren Beach, *The Method of Henry James* (Philadelphia, 1954), p. 213.
- 4) R. P. Blackmur, ed., *The Art of the Novel: Critical Prefaces by Henry James* (New York, 1934), p. 78. Hereafter referred to as *Prefaces*.
- 5) Cf. Irving Howe in his "The Political Vocation," included in *Henry James: A Collection of Critical Essays*, ed. Leon Edel (New Jersey, 1963), p. 166: "...he had no larger view of politics as a collective mode of action. He had a sense of the revolutionaries but not of the revolutionary movement."
- 6) *Prefaces*, p. 78.
- 7) Walter Dubler, "The Princess Casamassima: Its Place in the James Canon," *Modern Fiction Studies* (Spring 1966), 45.
- 8) *Prefaces*, p. 60.
- 9) Dubler, *op. cit.*, 57.
- 10) Edward Wagenknecht, *Eve and Henry James: Portraits of Women and Girls in his Fiction* (Norman, 1978), p. 70.
- 11) Henry James, *Roderick Hudson* (New York Edition), p. 492.
- 12) Cf. Wagenknecht, *op. cit.*, p. 54: "But she is not really the principle character in either of the books in which she appears, and she is almost as much a puzzle at the end of the *Princess* as she was before."
- 13) Cf. Howe, *op. cit.*, p. 159: "At times—I suspect the critics miss the snicker that comes from the future Lion of Lamb House—at times she is a creature of high comedy."
- 14) Wagenknecht, *op. cit.*, p. 71.
- 15) *Ibid.*
- 16) J. M. Luecke in his "The Princess Casamassima: Hyacinth's Fallible Consciousness," *Henry James: Modern Judgements*, ed. Tonny Tanner (London, 1968), pp. 184–193.
- 17) Brian Lee, *The Novels of Henry James: A Study of Culture and Consciousness* (London, 1978), p. 46.
- 17) Luecke, *op. cit.*, p. 193.